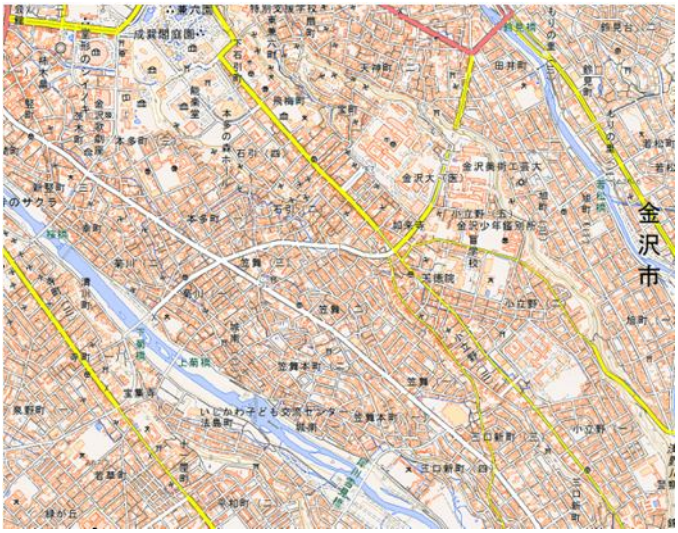
「日々の理科」（第 502 号） 2015（H27),11,19

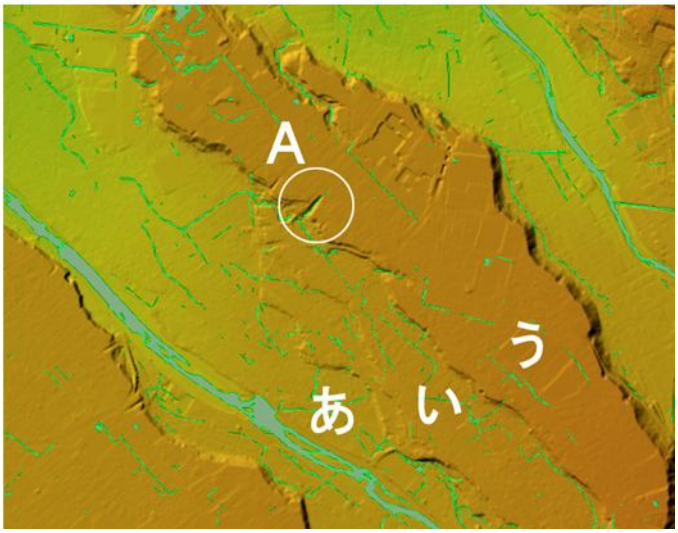
「金沢の地形（３）」

お茶の水女子大学附属小学校　田中　千尋

小立野段丘に切り込んだ、浸食谷の存在には、そう簡単には気づかない。普段現地を歩いている人か、「谷マニア」か、驚異的な地形図判読能力を持った人物でなければ無理だろう。



（上）は金沢市の小立野段丘付近の地形図である。都市部の地形図では、建物や道路、鉄道などの地図記号がぎっしりと描かれていて、肝心の等高線が非常に見づらくなっている。「地形図」本来の、最も重要な部分が機能していない状態なのである。



しかし、同じ範囲を「色別標高図」にして、カラーバランスとコントラストを調整すると、鮮明に地形が浮き出て見えてくる。例の段丘崖に切り込んだ浸食谷（図のＡ）もはっきりとわかる。

面白いのは、小立野段丘が、実は１段ではなく、２段に形成されている点である。これは、気のせいではなく、実際に新旧段丘が、２段になっているのだ。

「う」中位段丘面（数万年前までに離水）

「い」下位段丘面（数千年前までに離水）

「あ」沖積地（数千年前～現在まで堆積が続く土地）

一般には「う」と「い」を合わせて「小立野段丘」と呼ぶが、「い」の下位段丘を「笠舞段丘」と分けて呼ぶ場合もある。犀川沖積地と笠舞段丘の比高は数メートルなので、車で通過しても気づかないだろう。

さて、Ａの浸食谷であるが、一体現地の様子はどうなっているのだろう？もちろん、行って観察するのが一番いいのだが、なかなかそうもいかない。こんな場合に威力を発揮するのが、「グーグルマップ」の「ストリートビュー機能」である。昨日、私は茗荷谷の狭い路地で、ストリートビューを撮影している車に、はじめて出くわした。普通の大きさのバンで、狭い路地にも入れる。幸い金沢市は、車が通れそうな道には、ほとんどすべてストリートビュー車が入っている。

Ａの浸食谷の下部は、谷筋まで住宅が建っていて、地形はわからなかったが、上部は見下ろす形で、「撮影」することができた。

確かに道の下が、深い谷になっている。道のあるあたりが源頭（支流の最上流部）だろう。右側の家屋の下の石垣の角度からも、相当な急傾斜とわかる。谷底には、小さな流れもあるはずだから、私が子どもだったら、柵を乗り越えて、いい遊び場にしていると思う。金沢の地形・・・面白い！　　（つづく）